

病院薬剤師はこんな仕事をしています

薬剤部長 風間幸三

「以前は、外来受診して薬をもらう時は病院の薬局でもらったのに、今は外の薬局でもらっている（医薬分業）。病院の薬剤師は一体何をしているのだろう？」そんな疑問を持たれる方も多いと思います。

当院で扱っている薬は、外来で処方される薬以外に、入院でしか使用されない注射薬など、合わせると約 1500 品目にもなります。これらの「薬」について、安全で効果的に使用されるよう当院の薬剤師がどのように関与しているか紹介します。

注射調剤業務

注射薬も飲み薬などと同じように、医師の指示に応じて薬が適切に投与されるように、患者さんごとに薬剤師が調剤（医師の指示が正しいかチェックして薬を払出すこと）をしています。

注射薬は投与後の作用が速いこともあり、より安全に使用する必要があります。そのため、

“投与量は適切か”、“投与される点滴の速度は適切か”など様々なチェックをし、疑問のある場合には医師に確認し、注射薬が適正に投与されるように努力しています。また、注射薬の多くは直接、患者さんの血管を通して投与されるため、特に正確な作業が要求され、かつ細菌に汚染されないように衛生的な作業が必要となります。



抗がん剤を無菌的に調剤する石川さん

その中でも特に注意が必要な高カロリー輸液については、原則、薬剤師が無菌的な環境（クリーンルーム、クリーンベンチ）で調製（混合）を行うことで、注射薬の無菌性、正確性を確保しています

化学療法業務

がん化学療法を受ける患者さんの数は年々増加しています。今までは入院して行っていた化学療法も、患

者さんが自分の時間を大切に、家族と過ごす時間を少しでも多く持つために、外来で通院しながら行うことも多くなってきています。

そのため、薬剤部では抗がん剤が適正に使用されるように、入院・外来を問わず病院で実施される全ての抗がん剤を複数の薬剤師が調剤・鑑査・混合・混合後鑑査を行うことで、より厳格なチェック体制をとり、安全ながん化学療法を支援しています。

抗がん剤を混合するときも、薬剤師が安全キャビネットと呼ばれる専用の無菌設備によって混合を行い、注射薬の無菌性、正確性を確保しています。

服薬指導業務

薬剤師が直接入院患者さんのベッドサイドにお伺いし、使用されている飲み薬・外用薬・注射薬について説明する仕事です。薬の名前や飲み方や使用上の注意だけでなく、薬の効果、保管上の注意事項、副作用等必要な情報を提供するとともに、患者さんの薬への疑問や不安に答えることで薬を正しく理解し、使用して頂けるようお手伝いをします。

また入院患者さん1人ひとりの薬歴を確認し、薬の相互作用や他院の処方内容との重複がないかどうかなど、安全で効果的な治療を確保し、効果の確認や、患者さんの訴えから薬の副作用の発見を行ったりしています。

もし、入院することがあったら薬のことなら何でも薬剤師に相談してみてください。



病棟で服薬指導をする小牧さん